

「高レベル放射性廃棄物の地層処分と地域社会との『対話の場』を考える」 報告へのコメント

黒川哲志(早稲田大学)

「対話の場」で何を対話するのか？

- どのような成果が得られれば、対話が成功したと評価できるか？
 - 対話の場で、何を対話するのか？
 - 対話の場は、住民を納得させる場か？
 - 不安は必ず残る(不安だから飛行機に乗らない人は多い)。
 - 対話に参加するメンバーは、地域の各利益の代表者か？
 - 対話の場では補償も含めて取引を行い、地域の地層処分施設の地域的受容性の判断材料を提供するのか。特に寿都町。
- 対話には、地方政府によるフォーマルな意思決定に影響を与える正統性があるのか。
 - ミニパブリックスの結論であっても、民主的正統性には疑問が残る。

文献調査の役割

- 地質環境特性について、文献調査では「わからないので先に進む」とも読める説明は、批判されるべきものか？
 - 文献調査ではリスクが確認できないので、概要調査に進んでさらに調べる。それでも、リスクが確認できないので精密調査を試みるというのは、合理的なプロセスの進行である。
- 文献調査は、地域の政治的コンセンサスを形成するための時間として機能している。